

# 作庭塾 庭守研修報告

庭守会 会長 荒川 昭男

## 九十五才の庭師は今も現役

新たに立ち上げた作庭塾庭守の勉強会は、会員の協力のもと充実した内容で、しかも事故もなく予定の一年が終了した。

その締めくくりとして総勢十五名で、穴太石積みと重森三玲の庭をテーマに大津坂本と、京都に研修旅行へ行って来ました。

四月五日新横浜を早くに出発することが幸いし、比叡山坂本に着いたのは昼にはまだ早い時間。伝教大師最澄が開祖の天台宗延暦寺の門前町坂本は、琵琶湖の西岸に位置し、朝鮮半島との交易舟が行き来した日本海と、奈良、京都を結ぶ交通の要衝として栄えたこと。流通を担う坂本の馬借は、室町時代には蜂起や一揆を度々繰り返すほどの力を持っていたらしい。

延暦寺が織田信長の宿敵浅井、朝倉に組したとの口実により、元亀二年(一五七一年)九月織田軍の攻撃を受け、延暦寺の塔堂伽藍と共に坂本の町も灰燼となる。その戦いで数千人の死者が出たと伝えられている。信長の比叡山攻め以後、山上(山坊)の僧は山を下り、居住のための里坊が増えると同時に坂本の町も復興したとのこと。

最初に訪ねた吉田造園の資材置場では、山積みされた貴重な吉野石と、関東ではなじみの薄いチャリ石等を見学した。チャリ石は、敷いて積んで差石に直し、大きな石は景石に良しの使い勝手に幅のある重量感を持った石です。

また、硅石と石灰岩の層模様が特徴の伊勢の鎧石も、参加者にはめずらしい石でした(①)。

大正三年二月生まれの昌寅氏が、現在でも脚立に上がり仕事をしている話に一同驚きつつ、屋敷前に造られた昌寅氏の力作である石積みや、石組をカメラに収め、昌寅氏と社長の茂氏に丁寧にお礼を述べお別れをした(②)。因みに昌寅氏は私の師匠である。昼食は行を終えた僧侶の、衰弱したからだを気遣った食事が始まりと伝えられている「鶴喜そば」で舌づつみを打つ。

次に訪れたのは、慈眼大師の南海の廟所である慈眼堂。南海は徳川家康、秀忠、家光の三代将軍に仕え、比叡山の復興と江戸上野の東叡山寛永寺の創建に力を尽くした大僧正です。一〇八才の長寿を全うし家康、家光と同じ日光に葬られています。南海の座像が祀られている廟の前庭には、笠、火袋、竿が四角で中台と基礎が丸い独特の石灯籠が、十数基合掌するかの如く静かに立っている(③)。敷地内西側の高台には、天台宗開祖伝教大師最澄の最大の支援者桓武天皇の、奈良二上山凝灰岩で造られた大きな宝塔や、和泉式部、紫式部そして歴代の座主の供養塔が、宝篋印塔、五輪塔、無縫塔などの造りで並んでいる。

時代の流れによつて風化しながらも、温和な表情の阿弥陀の石仏に見送られ、静寂漂うお霊

屋を後にする。江戸時代末期まで、天台座主の住居であった滋賀院の門を抜けると、穴太積みの石垣が門を囲むように築かれている(④)。

穴太衆が文献に最初に登場したのは、比叡山が焼打ちにあった五年後の、天正四年(一五七六年)信長による安土築城、又は醍醐三宝院の普請(一五七七年)といわれている。穴太衆の祖先は、最澄と同じ朝鮮からの帰化人で、朝鮮の穴太族のこと。六六三年天智天皇のころ、百濟救済のため朝鮮半島に渡った大和朝廷軍は、白村江(はくすきのえ)の戦いで唐、新羅の連合軍に敗れたが、そのとき百濟の貴族、文化人、工人が日本に渡り帰化したといわれている。

坂本に住み着いた穴太族の、石垣積みの技法を持つた人たちが、七八年から始まった最澄の延暦寺の前身である比叡山寺創建に加わり、穴太石垣積みの基礎を成したと伝えられている。戦国時代から江戸初期にかけて、全国に次々と城が築かれた。その多くが穴太の地から城石垣積みに出かけた穴太の手によるものといわれている。現在坂本で唯一一人の穴太衆として、石垣積を継承している粟田さんの祖先も、四国に石積みに来ていた穴太衆について四国から坂本へ移住したとのこと(⑤)。

## 穴太積みの技法は朝鮮より伝わる

徳川二代将軍秀忠の一国一城令が制定されると、穴太衆の城石垣積は激減するが、河川や港湾等の土木工事に穴太の技法は生かされたことである。坂本は石積み町の町として観光客を呼び込んでいるが、特に里坊が建ち並ぶ辺りは、どちらを向いても穴太積みである。その里坊のひとつ律院の庭を拝見した。

千日回峰行を成し遂げた住職の叡南俊照阿闍梨様は、相変わらずの艶やかな、お顔でお元氣なご様子。比叡山を源とする大宮川の水を引き込んだ、浅い流れの庭をお茶をご馳走になりながら拝見する(⑥)。

信長の比叡山攻めるときには、山上で殺された人々の流した血で、この大宮川の水が何日にもわたって赤く染まったと伝えられている。重要文化財に指定されている二宮橋、走井橋、大宮橋の通称日吉三橋には参加者一同圧倒されたようだ。勾欄、橋板、桁石、桁受、橋脚のすべてが細工された巨大な花崗岩で組まれている。比叡山攻めの際、信長の命に従った殺生の罪滅ぼしのためかどうか知らないが、天下人になった秀吉がこの石橋を寄進した(⑦)。坂本から宿泊先の蓬萊神仏思想の「蓬萊の庭」他に「曲水の庭」等がある。どの庭も、作庭活動終焉の庭とは思えぬ、すべての石の個性が力強く表現されている(⑧)。

神仏から現世に 遣わされた作庭家

研究二日目にまず見学したのは松尾大社。松尾には立石づかいで知られる重森三玲の庭がある。七十八歳で亡くなるまでに三〇〇を超える作庭活動の最晩年の庭。松尾には、神が宿る磐座(いわくらは)を表現した「上古の庭」、蓬萊神仏思想の「蓬萊の庭」他に「曲水の庭」等がある。どの庭も、作庭活動終焉の庭とは思えぬ、すべての石の個性が力強く表現されている(⑨)。



②95才にて未だ現役の庭師吉田昌寅氏



①現在では入手がむずかしい独特な模様の守山石



④滋賀院門跡の苔むした穴太積



③慈眼堂石灯籠

元和一年(一六一五年)



⑥延暦寺里坊律院の遺水の庭



⑤叡山坂本駅前の豪快な穴太積



⑧日本最大の関寺の牛塔



⑦秀吉寄進の花崗岩で組まれた日吉三橋

とこで重森三玲が最初に手がけた庭は、昭和十四年の京都東福寺である。東西南北にそれぞれ異なる庭が、方丈を囲むように造ら



◎松尾大社「蓬来の庭」重森三玲氏晩年の作

れている。その四庭のうちで、私が魅かれるのは南庭の枯山水。丹波の長石や、穴が特徴の庭湖石等を組み、中国の渤海湾に浮かぶと伝えられる神仙島を表現しているらしい。

四〇年前初めてこの東福寺の庭を見たときの衝撃は、今でもその強さを失わず私のからだに残っている。

松尾の庭は過去何度か拝見したが、いつも考えることがある。これは私の勝手な解釈だが、何かを造りあげる芸術家とか職人は、処女作と晩年の作を比べると精神的支柱は別にして、現象的な面は変化があつて当然だと思つている。

しかし東福寺と松尾では、処女作と晩年を比較して大きな違いを見出すことができないのである。重森三玲が表現しようとした神や仏は、不動であり永遠的なものであるがゆえに変わらないのだろうか。何年か前、京大近くにある重森三玲の

自宅を訪ねたことがある。毎日眺める自宅の庭は、立石の強烈な個性を控えめにした、さぞかし静かな庭であろうとの勝手な想像は打ち砕かれた。あの独特の石づかい、重森三玲の生活というか人生そのものであつて、私の理解の域を超えていた。

話は少し横道に逸れるが、私は印象派の絵が好きである。その中でもモネとセザンヌにひかれる。二人とも連作がある。モネは睡蓮、セザンヌはサント・ピクトワール山。パリ中心部のチュイルリー公園にオランジュリー美術館がある。地下の円形展示室でモネの描いた睡蓮の絵を、初期から晩年まで観られるようになった。視力の弱くなった晩年に描かれた水蓮は、花というよりも散らかつていようゴミのように見える。

マルセイユから一日二本のローカルバスに乗り、サント・ピクトワール山を見に行つた。セザンヌがキャンバスを構えたと思しき場所に腰を下ろし、ほぼ一日山を眺めていた。石灰岩の塊のサンクト・ピクトワール山は、山というよりも氣勢を持った景石のように私には見え

た。いや景石より磐座と表現した方が正しいかも知れない。しかし晩年、からだの衰えたセザンヌが描いたサンクト・ピクトワール山は描き始めのころの山とは違い、はつきりした稜線は消え、山のイメージとは程遠い絵になつていいる。二人の晩年の絵から共通したものを感じている。それは、自分が描きたいから描くという情念のよなものかも知れない。モネもセザンヌも、観る側に立ち対象を描くなどということとは考えなかつたようだ。花がゴミになろうと、山がぼやけよう何しろ描ければ良かったのだから。それに対して神や仏を表現するのには、勝手な表現の姿容は許されないと、重森三玲は考えたのかも知れない。神や仏から、この世へ使われた終生変わつてはいけない使命感のような強い気持ちで、重森三玲は抱いていたようだ。したがつて東福寺と松尾から異なる印象を、感じなくても仕方がないと私は思つている。

ともあれ、重森三玲は自分が作庭したもの、神や仏をはつきり表現出来るうちに世を去つた。松尾をあとにして大徳寺の高桐院に向かつた(⑩)。

高桐院の目的は、細川三斎公の灯籠墓石と、朝鮮出兵の際に藤清正が持ち帰つたとされている王城の礎石。石灯籠は鎌倉時代の作

と伝えられているが、石造美術家の川勝政太郎は、南北朝時代の奈良系の特徴を有していると述べている(⑪)。

高さ六尺あまりの近世の取れた上品な造りで、所持していた利休が秀吉の所望を退けるために、わざわざ笠の威手(わらびて)を欠き三斎に譲つたと伝えられている。王城の礎石は、宝塔の塔身の細工を施し、袈裟型の手水鉢として降り蹲踞で組まれている(⑫)。

庭守の実技講習でいつの日か、降り蹲踞を行いたいとの予定があつたので良い参考になつたのではないかと。今回の研修では以上のか。今回の研修では以上の他に、今宮神社において構成鉢物が葦青石(きんせいせき)と黒雲母の通称「コメ真黒」と呼ばれる珍しい石を見た。研修の最後に

鷹ヶ峰の「しようざん」で樹齢四五〇年の台杉や、良形の吉野石をふんだんに配石した流れを見学した。今まさに満開の桜の中での研修が、参加にどれほどの参考になつたか知ることは出来ないが、ひとまず「庭守」初めての研修は無事終了した。皆さんご苦労様でした。



⑩大徳寺高桐院山門前にて



⑫大徳寺高桐院の袈裟型の降り蹲踞

⑪大徳寺高桐院墓地内の細川三斎公灯籠墓石

山延曆寺の塔堂伽藍が歴史を背負つて建っている。ただし、爽やかなこの辺りは、全国に三千八百ある山王総本宮の内路。

その日吉大社の神体山である八王子山の参道口でもある。したがつてこは、神と仏が共に鎮座する聖域になる。伝来の仏教と、自然信仰の結合である神仏習合の領域。聖域には、天端に切妻屋根をのせた山王鳥居とも、惣合(そうごう)鳥居とも称する日吉大社独特の珍しい鳥居が建っている。高さ一〇メートルはあるだろうか。実に堂々としていないかと思ふ。

自然を身近に、また此方(こなた)と彼岸を一体として感じるこの様な情景は、ある意味神仙島を築いた池泉庭や、浄土庭園の中を散策しているような、落

着いた気持ちになれる。洛中の喧嘩な環境に伽藍を配し、名庭を築いた建仁寺、妙心寺、大徳寺等の臨濟宗の各寺院とは、異なる別の世界である。夢窓疎石が黄金時代を築いた臨濟宗は、数多くの名庭を造り残してきたが、それとは対照的に天台密教は、作庭には臨濟宗程関心を示さなかつたと伝えられている。

相阿弥作と伝えられている青連院は、数少ない天台寺院の名庭である。他に梟の手水鉢で知られる曼殊院、独特の石灯籠が立つ蓮華寺、大原の三千院と庭が有名な天台寺院もあるが、平安貴族や文人達の多くが庭に深い造詣を持つていたのだからと考えさせられた。平安の人々の庭への思いは、移り行く歴史の中で夢窓に受け継がれ、更に変容し臨濟寺院で枯山水が誕生した。禅の教義から逸脱したとしても、自己主張を貫いた夢窓の石に対する姿勢に親しみを抱くと共に、僧侶が何故「石立僧」になつたのか、娑婆世界に住む私にも最近少しだけ見えてきたような気がする。

研修日記

以前、専門書の中で、平安時代の歌人源俊賴の、「石はさもたてける人の心さへかたかと有てみえもするかな」という歌があることを知つた。この「石」という題がついた唄の意味は、石組のなかに人柄、あるいは才能があらわれる。つまり、石組みは人をあらわすとの意味なのだが、この歌を知つたときまず夢窓を思い浮かべた。同時に、橋俊綱は「作庭記」を誌したがゆえに後世に名を残したが、平安貴族や文人達の多くが庭に深い造詣を持つていたのだからと考えさせられた。平安の人々の庭への思いは、移り行く歴史の中で夢窓に受け継がれ、更に変容し臨濟寺院で枯山水が誕生した。禅の教義から逸脱したとしても、自己主張を貫いた夢窓の石に対する姿勢に親しみを抱くと共に、僧侶が何故「石立僧」になつたのか、娑婆世界に住む私にも最近少しだけ見えてきたような気がする。

比叡山の裾に広がる樹林は、いつ訪れても爽やかである。樹林のあちらこちらに、注連縄(しめなわ)が張られた磐座(いわさか)の、地元では白石と呼ばれる花崗岩や社が点在している。山上(やまがみ)には、京都御所の表鬼門の守りとして東塔、西塔、横川のエリアに別れた、天台宗総本